

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ブラック・ブレイド～黒の大剣～

【作者名】

衛宮

【あらすじ】

これより始まるのは、一人の男の物語。

本来の物語では己の存在理由さえ解らず、ただ戦争に憑かれた男が、とある出会いをきっかけに変わったならというエフのお話。

伊熊将監という男は、いつたいこの世界で何を成すのだろうか？

Episod 伊熊将監といつ男

西暦2021年。

人類は突如世界中に出現した寄生生物『ガストレア』との戦いに敗北。

人々はガストレアを退ける金属『バラニウム』で作られた巨大な壁『モノリス』を建築し、モノリスで囲われた『エリア』の中でガストレアから身を守りながらの生活を余儀無くされた。

しかしそれも完璧なものではなく、希に外からガストレアが侵入することもしばしばあった。

そこで、そんなガストレアを排除するために軍事力を民営化した組織である『民間警備会社』 通称『民警』 が「ガストレア」に対するスペシャリストとして活躍する事となる。

そして10年後の現在。

今宵もまた、人々の偽りの平和を守るために暗躍する一組の民警の姿があつた。

『ターゲット目標捕捉。予定通り、現在地から東に1キロの地点にある廃ビルに追い込みました』

無線越しに聞こえる少女の声。
歳は十歳前後だろうか。

「…………」

無線の相手であろう男は無言を通す。
少女はそれが続きを促しているのだとわかつており、特に気にした
様子もなく報告を続ける。

『見た日の特徴からモデル・スネークのガストレアと識別。おそらく
ステージ だと思われます』

ガストレアとは即ち、『ガストレアウイルス』に感染し、遺伝子を書き換えた生物のことをいう。

再生力が異常に強い、赤い目と醜く巨大な体を持つなどの共通点はあるものの、通常は元の種から来るモデル名で呼ばれる。

今回は『モデル・スネーク』つまり蛇のガストレアである。

『 報告は以上です。なにか質問等はありますか?』

「……ウゼン」

そこで、男はようやく少女には言葉を返す。

顔をあげた男の人相は、一言で言い表すなら『不良』だらう。
猛禽類のように鋭い目、染めた金髪。

そして体は大きくはないものの、黒のロングコートの上からでもわかる鍛え抜かれた筋肉。

しかし、男が背負っている身の丈ほどもあるバラニウム製の大剣バスター・ブレードが、彼がただのチンピラではないことを物語っている。

そう、彼こそがこの物語の主人公。

大手民間警備会社『三ヶ島ロイヤルガーダー』所属、IP序列15

84位のプロモーター。

伊熊将監いくましょうかんである。

「要は……ぶつた斬りやあ良いわけだ。そりだら夏世かよ」

『…………その通りです将監しょうかんさん』

将監ショウカンは相棒イニシヤーナーの返答を聞くと、近くに止めてあつたバイクに跨がり田的タマチ地へと駆けしていく。

「わあ、祭りの始まりだ」化け物共ハカラクモノ』

今宵も、黒の大剣が輝くのだった。

「…………将監ショウカンさん

「…………はー」

伊熊将監は今、絶対的な窮地に陥っていた。

そう、今彼が前にしているのは警備会社『三ヶ島ロイヤルガーダー』の三ヶ島社長。

つまり、彼の雇い主である。

問題は、なぜ三ヶ島社長が将監の前にたたずんでいるのか 実際は社長室の自分の机に座っているのだが である。

「そろそろ、説明してくれないかね？」

そういうて三ヶ島社長が取り出した一枚の紙には、赤字でいつ書かれていた。

『廃ビル倒壊による被害総額

推定1,000,000円』

そう、それは昨日の業務での出来事だった。

「ビルに逃げ込んだガストレアが思つたよつしにくいでイラッとしたから、ぶつた斬つた。気がついたらビルも斬れてた。以上」

「何を説明しきつた顔してんの！ 周りに人がいなかつたから良いものの、もしも人身被害が出ていたらどうするつもりだつたんだ！？ 百万円じゃ済まされなかつたぞ！」

「まあまあ、過ぎちまつたことはじょつがないじゃねえか。過去ばつか振り返つてるから老けるんだぜ三ヶ島さん」

「余計なお世話だよ！ そもそも原因はお前だからな!!」

机をバンバンと叩きながら心中をぶちまける三ヶ島社長。
しかも、今年に入つて三回目の被害届である。

そのいづれもが推定百万円前後の物で、正直『三ヶ島ロイヤルガーダー』は多大な借金を抱えていたりする。

「はあ、もういい。とりあえず全額自己負担だから」

「ちよッ、三ヶ島さん!?」

「当たり前だろ。今年に入つてもう二回目、会社としてもこれ以上借金を抱えるわけにはいかないんだよ」

「なん……だと？」

将監は悶絶する。
なにせ、百万円というのは将監の一ヶ月分の給料とほぼ釣り合ひの
だ。

つまり……

「今月分の給料……ゼロ?」

将監は田頭がじんわりと熱くなるのを感じた。

決して泣いているわけではないと自分に言い聞かせながらも、残酷すぎる現実を前に膝を屈しそうになる。
しかし、彼は知った。

三ヶ島といつ男は、決して血も涙もない悪魔ではないということを。

「……まあ、君が稼ぎ頭だというのもまた事実だ。仕方ないから半分は社で負担しよう」

「三ヶ島さん……あんたって人はツ!!」

「ただし、もつ無駄な器物破損はしないこと。いいね？」

「あ、おう。善処する」

三ヶ島はびつは無理だらうナビ、とため息混じつて懶病を吐く。
三の将監も無理だらうと直覺しているため、特に反論はしなかつた。

「まあここ。それより、明日『防衛省』に行こうとなつたから、お前も着つてくれ

「ボウエイシワウ～つてあの、日本の国防を担う。」

「そう、その防衛省だよ。一応いっておくが理由はわからぬいぞ。ただ来いとしか聞かされていないからな」

「なるほど、それで護衛モダキッて」とか

「もうこいつだと。では頼んだぞ」

「あこす」

将監が会社の駐輪スペースに行くと、すでに先客が彼の愛車に跨がっていた。

「……遅いです将監さん」

「うつせえぞ夏世。文句は三ヶ島さんに言え」

千寿夏世
せんじゅかよ

将監の『イニシエーター』だ。

そもそも民警というのは、ガストレーウイルスをその身に宿して産まれた『呪われた子供たち』ことイニシエーターと、ペアの司令塔および幼い少女であるイニシエーターの精神的支柱となる人間の『プロモーター』の一人一組のことをいう。

この場合はプロモーターが将監、イニシエーターが夏世ということになる。

「今田はもう帰るべ」

「それは……クビですか？」

「チゲーよ！ 明日まで仕事がないだけだ!!」

何言い出すんだこのガキは、と一人愚痴りながら将監はバイクのエンジンをかける。

ちなみに将監の愛車は『ワルキユーレルーン』というガストレア戦

争より以前に作られた古株をカスタムしたものである。

具体的には排気音を極限まで押さえたり出力を大幅にあげたりと対ガストレア戦でも活躍できる優れものだ。

「将監さん」

「あ？」

「晩御飯は何が良いですか？」

「……肉」

これより始まるのは、一人の男の物語。

本来の物語では己の存在理由さえ解らず、ただ戦争に憑かれた男
が、とある出会いをきっかけに変わったらというエフのお話。
伊熊将監という男は、いったいこの世界で何を成すのだろうか？

エピソード一 道化師との邂逅

「んで、いつあじつてこいつ事だ二ヶ島もん？」

「私に聞くな。いひちだつて混乱してんだ」

将監と夏世、二ヶ島は現在、政府のお偉こわいこと呼ばれて防衛省に来ていた。

ビル倒壊やその他諸々でよばれたのではなくいかと内心ヒヤヒヤした将監だが、ござ来てみればそれ以上の驚きが待っていた。

そつ、よばれた民警会社は『二ヶ島ロイヤルガーテー』だけではなかつたのだ。

「じいだ夏世」

「……間違いあつません。有名ビルのを中心にして東京ヒリアの民警会社がほとんど集まつてこます」

突然だが、千寿夏世はモーテル・ドルフィンのイーシェーターだ。つまり、『イルカ』の因子をもつている。

そしてイルカといつ動物は、一般的にとても頭の良い動物として知られているだろ？。

つまり何が言いたいのかと云ふと、夏世は頭が良いく。

数値に直すなら『HQ210』はあるじこ。

そんな夏世の頭脳をもつてすれば、東京ヒリア中の民警会社を覚えるなど雑作もない事なのだ。

さて、話を戻そつ。

なぜ自分達はここに呼ばれたのか。

それはここにいる全員が共感できる疑問だろう。

いや、現実をそのまま受け入れるなら、ここまでの人才を必要とするくらい大きな仕事があるということなのだけれど。

将監が無い頭を捻つていると、自分達も通つた大きな扉がゆっくりと開く。

今度はどんな大物が来たのかと見てみると、入ってきたのは高校生くらいの若い男女だった。

それを見て、将監は思わず舌打ちをする。

「おーおー、最近の民警の質はひつなかつてんだよ。ガキまで民警ひつこかよ」

無意識の呟きは、どうやら等の彼らに聞こえてしまつたらしい。
男の方が女を庇つむつて前に出る。

「アンタ何者だよ、用があるならまず名乗れよ」

「チツ、何が『まず名乗れよ』だ。ガキはひとつと回れ右して帰れや

「なッ、俺だつて民警だ！それに、年で実力が決まるわけじゃねえだつ！」

「ムカツクなテメエ、なら今ここで試すか？」

将監はそう言い放つと、背に担いだ大剣の柄にそつと触れる。

その動作に一瞬遅れて、少年も拳銃を取り出した。

顔を見ると玉の汗を浮かべていることから、実力差はきちんと理解しているらしい。

束の間の沈黙。

先に動いたのは、将監……ではなく、将監のイーシェーターである夏世だった。

「……で、

「ガッ!?って、何すんだ夏世!!」

可愛い掛け声と共に放たれた飛び蹴りは角度タイミング共に最適、改心の一撃といつても良いだろう。

そんな一撃を食らった将監はとこいつて、涙目になりながらそれを実行した犯人を睨み付ける。

「今はまだ考えても将監さんが悪いです。そんなのだから周りから脳筋脳筋言われるんですよ？」

「いや言わねーよ!つか言つてるのはお前だけだろ!」

「いえいえ、皆やう思つてますよ。ただ言わないだけです。『将監さん＝脳筋』なんて地球が青いのと同じくらい常識じゃないですか?」

「初めて知ったはそんな常識!!……てか、マジなのか? あいつマジでそんな風に思つてたのか?」

軽くへこんだ将監を尻田、夏世は先ほどの少年少女に向き直る。すると、ペコッとお辞儀をした。

「先ほどはすみません。私は将監さんのイーシェーターで千寿夏世と言こまゆ」

「え? あ、ああ。お、俺は里見蓮太郎だ。で、こつけが

さとみれんたろう

「天童木更よ。えと、よひしく」

「はい。将監さんの口が悪いのは仕方がないことなので、どうか許してください。ちなみに将監さんの言葉を代弁すると『ガキは黙つて大人に守られてりや良いんだよ』的なことを聞いたかつたんだと思います」

それでは失礼します、と夏世は将監を引つ張りながら元の場所に戻る。

それを一人は啞然と見送る事しかできなかつた。

「……なんだつたんだ？」

「さあ？ でも将監つて呼ばれてたから、たぶん伊熊将監よ。『エロ序列』は1584位

「千番台か……」

もしもあそのまま戦つていたら、序列十一万台の自分に勝機があつたのだろうかと蓮太郎は考えたが、どう考へても無理だ。

何せ睨まれただけである様だ。

まともに戦つたら瞬殺されてしまう。

「それに彼、一時的に序列五百位まで上げたこともあるくらいだし、今 の里見くんじやどりやつても勝てなかつたわね」

「……マジかよ」

騒ぎも一段落し、木更が席に着くとそれを見計らつたかのよつて禿頭の人間が部屋に入つてくる。

どうやら、ようやく話が進むようだ。

自らの場所に戻った将監は、一瞬だけ身構える。

「本日集まつてもらつたのは他でもない、諸君等民警に依頼がある。依頼は政府からのものと思つてもらつて構わない」

『政府』からのだと?』

いくら脳筋な将監でも、この依頼のヤバさくらいはわかる。

政府がここまで戦力を必要とするということは、かなり危険な依頼と思つて構わないだろう。

「本件の依頼内容を説明する前に、依頼を辞退する者はすみやかに席を立ち退席してもらいたい。依頼を聞いた場合、もう断ることが出来ないことを先に言つておく」

将監が周りを見渡すと、案の定立ち上garものは一人もいなかつた。欠席と思われる一つの座席以外が空くことはなかったのだ。

「よろしい、では辞退はなし」ということで、説明はこの方に行つても大写しになる。

「ひら

禿頭の男が身を引くと、突如背後の奥の特大パネルに一人の少女が大写しになる。

『いきませんよつ、みなさん』

少女が口を開いた瞬間、椅子に座っていた社長格の人間が一斉に立ち上がつた。

雪を被つたような純白の服装と銀髪、現在の東京エリアの統治者

聖天子。

「……待て、将監」

「……んだよ、三ヶ島さん」

他のプロモーターたちが驚きで立ち尽くしている中、将監は踵を返し入ってきたドアへと向けて歩き出していた。

すると、禿頭の男も気づいたのか慌てたように叫び出す。

「貴様、依頼を聞いた後は断れないと言つたはずだぞー。わつさと元の場所に戻れ!!」

「うつせえぞハゲ。俺はまだ依頼内容を聞いてねえだろ。それに、これはあいつとの『契約』だ。俺は聖天子の依頼は受けねえ」

「ハッ……貴様、なんと言ひ口の聞き方だ!!」

一発触発の空氣。

しかし、それを破つたのは他でもない件の聖天子だった。

『待つてください。将監さんの仰つている事は事実です』

将監の存在を確認して僅かに目を伏せる聖天子だが、すぐに凛とした佇まいへと直つて禿頭の男を見る。

男はそれでも「し、しかし」と反論したが、國家元首の眼力を前にして怯んでしまった。

『私は、本来ならこうして貴方の前に顔を出せないくらいの事をしました。例えそれが不慮の事故だったとしても、私の罪に変わりはありません。しかし、今はどうか私の……いえ、東京エリアの為にこの依

頼を受けてはもらえないでしょ？』

聖天子は真っ直ぐに将監を見ながらそう言った。

しかし、その言葉に帰ってきたのは将監の冷めた舌打ちだった。

それでもなお説得しようと聖天子が口を開きかけたその時、突如部

屋中に響き渡るほどのけたたましい笑い声が響き渡った。

声の主は、先ほどまで空席だった社長席にいた。

仮面、シルクハットに燕尾服の怪人。

その様は、まるで道化師。

「誰だテメエは」

「おつと、これは失礼。端的に言つと私は君たちの敵だ」

「ヤリと、将監は道化師の仮面の下の素顔が一瞬だけ歪んで見えた。